

川中島合戦における妻女山布陣の地理的・戦略的考察

— 戦略的視点からの意義と可能性 —

The geographical and strategic review of Saijosan lineup in battles of Kawanakajima

— The significance and possibility from the strategic viewpoint —

海上 知明[※]

Tomoaki Unakami[※]

要 旨

The fourth battle in 1561 was the biggest and most severe among five battles of Kawanakajima. The key of the battle was Saijosan lineup embattled by Uesugi Kenshin, which entirely led the standoff to the battle of Hachimantai. This paper is a preliminary research of Saijosan lineup from geographical and strategic point of view. Many previous researches were approached by humanities point of view but there are not many literatures analyzed from those points of views, partly because of lack of historical evidences. As a result, there were not many contributions of previous researches to its meaning in military or social science. Albeit it is true that there would be no progress without new historical evidences in a sense, comparisons and applications of theories in strategy to narratives of various military tales might give a new possibility in any analysis of old military history. This trial analysis based on those inductions and deductions could contribute to the development of the analysis in history. Saijosan line up has been referred by many historians, academics and military stuffs including Admiral Isoroku Yamamoto. But they usually treat it as an off-the-cuff action and seldom research the intention of Uesugi. There is even the view that it is logically impossible for Uesugi to embattle his force in Saijosan. This paper examines the hypothesis that Saijosan lineup is a part of the strategy built on the deep insight for the power game in the central part of Japan. The analysis of the geographic position of Saijosan in Kawanakajima, and of the geopolitical position of Kawanakajima in the central part of Japan, where Hokuriku political power and Chubu political power go back and forth, reveals the supreme strategy of overall locations and lineups of Uesugi forces.

キーワード : The fourth battle in 1561

Saijosan lineup

geographic position

はじめに

上杉謙信と武田信玄とによって12年間に数度にわたって繰り広げられた「川中島合戦」中、最大の激戦と言われた永禄4年（1561年）の合戦において、上杉謙信の取ったとされる妻女山布陣を戦略的に考察することが本論文の主旨である。過去の研究状況を概観すると、川中島合戦は、古戦史に属するため、人文系からの分析が中心であり、あまり戦略的な考察は行われていない。発刊された書籍は少なくないが、戦略的な分析を試みたのは、わずかに浅野裕吾氏が、限定戦争時代における決戦として

※日本経済大学経済学部経済学科

取り上げ、河野収氏が五回戦を網羅した程度である⁽¹⁾。特に、この妻女山布陣は、著名なわりに、その意義について述べられることがほとんどなかった。それだけでなく、川中島合戦はその知名度にも関わらず未知の部分が多く、しかも天下に影響を与えなかったという仮定から、戦前に参謀本部がまとめた『日本戦史』にも掲載されていない⁽²⁾。

川中島合戦が戦史分析としてとりあげられにくかったのは、戦いの経緯を記した主要な書籍がいわゆる「軍記物語」であることにも一因があるようである。しかし「軍記物語」にも戦略原則のような骨格的真実を見いだすことは可能である⁽³⁾。特に「川中島合戦」のように史料が不足している合戦については⁽⁴⁾、信憑性を高めようとする書物の場合にも否応なく「軍記物語」の領域に踏み込まざるをえない場合がある⁽⁵⁾。実際に「軍記物語」の存在がなければ、戦いの経緯そのものはまったく不明になってしまう⁽⁶⁾。従って、社会科学的な分析手法をその都度加味することで補える側面は多々存在する。戦略的妥当性を演繹法と帰納法で検証してみることは歴史分析の発展に大きな意味を持つものと考えられる。従って本論文における分析は、新しい史実の発見や、史実の積み重ねではなく、演繹法と帰納法とを併用して諸軍記物語を比較しながら妥当性を検証する形で進めている。

本論文においては、特に上杉謙信のおこなった妻女山布陣が外線の戦略につながったことに脚光をあててみた。通説では「戦略の信玄」と「戦術の謙信」と呼ばれることが多く⁽⁷⁾、そのために謙信の妻女山布陣は単なる奇抜な発想とみなされ、合戦の軸は八幡平の戦い方における戦闘で言及されることが圧倒的である。しかし、実際には「謙信の戦略」⁽⁸⁾が「信玄の戦略」を凌駕したことにより、信玄は決戦に引き込まれ、八幡平の戦いが謙信優位に展開した。それは謙信の妻女山布陣によって隠された善光寺-春日山城連絡線の効果によるものであった。なお謙信、信玄とも度々名前を変えているが⁽⁹⁾、混乱を避けるため本論文においてはすべて上杉謙信、武田信玄で呼び名は統一してある。

1. 永禄4年会戦以前の状態

「川中島合戦」を引き起こしたものは膨張要求をもつ武田信玄の信濃侵略と、上杉謙信の義侠心であるが、戦場は巨大な地政学の産物として決定された。古来、川中島周辺は北陸勢力と中部勢力とがぶつかり合う地点であったからである⁽¹⁰⁾。

川中島地方とは南佐久郡から流れ出た千曲川と松本平経由で流れてくる犀川が合流して信濃川を形成する地点で、ちょうど千曲川と犀川にはさまれて巨大なデルタを形成している盆地である。川にそった盆地として長さは30キロメートル、幅は広いところで10キロメートルほどであり、信濃最大の穀倉地帯であった。

この地で永禄4年(1621年)に戦国史上も未曾有と言われた大会戦が行われることになる⁽¹¹⁾。永禄2年、謙信は上洛を敢行し、さらに永禄3年には関東へ出兵して小田原城を包囲している。この上洛と関東出兵を経て、謙信は関東管領(正確には関東管領支援)に就任している。関東管領は名目上の地位と言われているが実際の影響力は広範囲なものになり、ほぼ東国全体に及ぶものになった⁽¹²⁾。一方、信玄は目標を領土拡張に限定していたため、関東そして飛騨や越中にも政略活動を行い、川中島方面では前線基地、海津城を建設し⁽¹³⁾、野尻湖東南の割ヶ岳城を占領していた。講和期間中の領土拡

大は信玄の常套手段である。このため謙信は関東より急遽帰国し、川中島に再度出撃することにする。

信玄の行動原理には端々に至るまで『孫子』がいきづいている⁽¹⁴⁾。永禄4年の大会戦前に信玄は大戦略、戦略、戦術各方面において考えられるだけの布石はうっていた。

大きな政治勢力圏の推移を見れば、関東管領として名目的ながらも東国全体に指揮権を有する謙信に対し、信玄は外交力によって影響力を拡大する。それによってバランス、オブ、パワーを信玄優位に傾けようと努力したのである。天文23年（1554年）、反上杉同盟とも言うべき北条氏・今川氏との同盟によって背後の安全を確保したのみならず、北条氏・今川氏の援助も受けることが可能になった⁽¹⁵⁾。また信玄の正室・三条の方との縁⁽¹⁶⁾を利用して石山本願寺とも好を通じ、加賀、越中方面の一向一揆とも結ぶことに成功する。しかも越中の神保氏は信玄と関係を結んだから謙信の領国は、北陸方面、中部方面、関東方面で敵と向かい合う形となり包囲される。さらに謙信の同盟者も切り崩しにかかる。信玄は大戦略的包囲を行いつつバランス、オブ、パワー上での優位をめざしていた。信玄による同盟政策と謙信側の同盟離間政策によって相対的にバランスは大きく動いていく。

北信濃では上杉方とみられていた海野氏、仁科氏、香坂氏が肅清されて足場が固められ、武田一族内で信玄を裏切った勝沼信元を討ち取って内部も強固にした。相対的優位のため、敵そのものの弱体化もはかられる。謙信家中の裏切りも誘われた。比較的早くに行われたのは謙信側の豪族・毛利氏への裏切りの誘いであるが、重臣を狙っての政略も活発であった。天文23年（1554年）に北条高広が、さらに弘治2年（1556年）には大熊朝秀が信玄の策動で反乱を起こしている。

川中島地方への影響力拡大においては、割ヶ岳城陥落と海津城建築が持つ意味は大きい。海津城は川中島で合戦をする際の前線基地であるとともに、常時の侵略拠点であるから、信玄は着実に北信濃での勢力圏を拡大していった。

戦略的布石も次々にうたれていく。特に重視されたのが兵站である。川中島と甲府の距離は160キロもあり、春日山と川中島の距離（70キロ）の2倍以上である。そのために戦場への兵力集結でも長陣への対応でも不利な立場にある。川中島地方での現地調達には民心を引き離すから避けなければならない。その克服のために、甲府と川中島の間地点、海野に兵站基地を設け、食糧と武器とを備蓄させた。海野と川中島の距離は40キロほどである。これによって信玄は補給の問題を解決する。さらに甲府から八ヶ岳の裾野に向かう軍用道路（信玄の棒道）が建設されている。この道路を利用して大軍がすみやかに川中島に集結することを可能にした。しかもその軍用道路には10町おきに狼煙場が築かれており、川中島からの狼煙は2時間程度で甲府に届くような体制を整えたのである。

防御面では謙信の大幅な進行に備えて柏鉢城（上水内郡）、東条城（植科郡）、大岡城（更級郡）の籠城衆を定めている。さらに対謙信戦を見越したと思われる軍事訓練も行われていた。

2. 謙信の出陣

関東に出兵していた謙信は、一連の信玄の北信濃での挑発行為を黙視できず信玄との決戦を行うことにする。謙信の戦争目的は、決戦によって信玄を討ち取ることを第一義とし、討ち取れぬまでも大打撃を与え信玄の心の奥底に恐怖心を扶植することであった。そのために当初から殲滅戦が志向され

ていたとみなすべきであろう。

対信玄作戦において、最大の問題はいかにして決戦に持ち込むかであった。旗印にするほどに『孫子』を学び、その戦理に忠実で、しかも慎重このうえもない信玄を決戦に引き出すには、信玄が絶対勝つという確信を持つ必要がある。しかし、いかに決戦に持ち込んだとしてもその結果敗北してはもとともこない。謙信は一般的な戦理に従う限りは、信玄が勝利すると確信させるような布陣と動きの中に罠を仕掛け、その一瞬に勝利を見いだそうとした。それは大きく地図を睨んでの罠である。

この当時、謙信の領土は越後・上野・佐渡・北信濃、信玄の領土は甲斐・信濃過半、石高的には謙信が上回っている⁽¹⁷⁾。慶長3年の検地を当てはめたとしても謙信の領土は百万石を上回っている。石高に対する兵力は高柳光寿氏以来、1万石につき250人という算出方法が有名であるが、農兵の比重をあげるにより250人を超える兵数を集めることも可能であった⁽¹⁸⁾。

永禄4年(1561年)8月14日、謙信は春日山城を出発した。優れた戦略家の常で謙信は目的地を複数示していたから、当初、越中方面への出陣⁽¹⁹⁾と考えていた者も多いようである。

謙信が春日山を出立する時の兵力は1万人とされている⁽²⁰⁾。動員能力的にみて、謙信が春日山城に残せた兵力は長尾政景以下2万人強。さらに謙信は岩代の芦名氏、羽前の大宝寺氏に留守の援軍まで頼んでいるから、春日山城にはさらに多くの兵力が籠もっていたことになる。通常、大規模な遠征を行う際には、全兵力の3分の2程を引き連れることが多いから、この国元の残存兵力はいかにも過大である。この兵力配置状態は深く考察されること説明も軽くなされることが多い。例えば、信玄の外交努力により越中や関東方面の抑えが必要であったこと、謙信の指揮する兵力数からの逆算などで説明されることが多い⁽²¹⁾。はなはだしい場合には動員能力の限界という指摘もあるが、それは前述したように正確な事実ではない。

謙信の率いる軍勢1万人に村上義清、高梨政頼、井上昌満、島津忠直ら北信濃の豪族達3千人が現地で加わった。単に川中島地方の征服が目的で有れば、3千人が籠もっている信玄方拠点・海津城を攻略すべきである。しかし謙信は善光寺に後詰めとして5千人の兵を残すと、海津城を横目に通り過ぎ、自分と信玄との勢力境界線である犀川を渡り、8月16日に信玄の勢力圏奥深く妻女山(西城山)⁽²²⁾に布陣した⁽²³⁾。妻女山布陣の隠された真の、そして最大の目的は、信玄の目を川中島地方という限定された地域に釘付けにするためである。なお、妻女山布陣には疑問を呈する意見もあるが、軍事的にみて十分可能であったと判断できる⁽²⁴⁾。春日山城と善光寺の行程は2日間かからない。

海津城を放置し、自ら少数の兵とともに武田領内に入り込んだ謙信の行動に信玄は判断をつきかねたようである。謙信の劇的な妻女山布陣は、その奇抜さゆえに信玄の目をそこに集中させてしまい他の要因、特に大規模な兵力配置を覆いかくしてしまった。当初は信玄も謙信本隊の行動以外の要因に注意を払っていたのかもしれない。しかし妻女山布陣以降は謙信本隊を謙信がどのように駆使するかのにみ神経を集中してしまう。この段階で信玄は仕掛けられた罠にはまったのである。

確実に言えることは、甲府との連絡位置から謙信に睨まれ、このままの状態では海津城は見殺しとなることである。信玄も早々に川中島へ出馬して海津城を救援しなくてはならない。おそらく信玄の動員能力は3万人前後、遠征に従軍させられるのが2万人程度であろう。残る3分の1は治安維持と外敵の侵入に備えるために残しておかなければならない。信玄は一戦場への戦力の集中ということで、

可能な限りの兵2万人を川中島地方に投入する。甲府に1万3千人の兵を集め、8月18日に甲府を立し、川中島をめざして北上しながら在地の兵を招集し8月24日の川中島到着段階に1万7千人、これに海津城に籠もっている兵も3千人を加味しての話である⁽²⁵⁾。

一戦場への兵力集中を達成し、大軍をもって謙信軍の後方に回り込んで補給を遮断すれば謙信は戦わずして軍を枯渇させる。もし決戦を挑んだとしても信玄領の中で、2.5倍の大軍を有し、地の利を得ている信玄が圧勝することになるだろう。城攻めには数倍の兵力が必要とされるから海津城を保有する信玄は戦う前から優勢であった。しかし一見戦理に反して時間とともに不利を加速させるように見える妻女山布陣を、しかも少数の兵力でなぜ謙信がとったかということは信玄の不審感を誘ったはずである。海津城放置については、城攻めに手間取っている間に、信玄の本隊が到着すれば、謙信軍は海津部隊と武田本隊によって挟撃されることになるからである。しかし妻女山布陣の説明がつかなかった⁽²⁶⁾。

当初、信玄は謙信の妻女山布陣の意図を、北上する自軍を迎撃して決戦にもちこむためと判断したようである。第2回戦で謙信が『孫子』的戦理にも忠実なことは理解していたし⁽²⁷⁾、同時に第3回戦を通じて謙信が信玄との決戦を望んでいることも理解していたからである⁽²⁸⁾。そのために信玄は地蔵峠から直接海津城に入る進路を避け、北国街道を通して大回りしながら妻女山と善光寺を遮断するように茶臼山に陣取った⁽²⁹⁾。地蔵峠を通過すれば妻女山から駆け下りて一気に殲滅させられてしまうと考えたのである。その大回り進路にしても、千曲川右岸を通れば右手に山、左に千曲川という地形で決戦態勢で謙信が待ち受ければ避けようがない。千曲川を左岸におくことが川を天然の外堀とする形での慎重な進撃をしている。

3. 膠着状態での対陣

海津城にはそれ以前から籠城していた武田軍の兵3千人がいたから、信玄の茶臼山布陣によって茶臼山-海津城の遮断線が引かれ、妻女山の上杉軍は本国とも善光寺とも補給も連絡も絶たれることになり、文字通り袋の鼠となってしまう。

この時の上杉・武田両軍の配置は、上杉軍は妻女山と善光寺を南北に結んで8キロ、武田軍は茶臼山と海津城を東西に結んで5キロであるから、この2つの線が交差する形で相互に挟撃する体制である。しかし、海津城を保有する信玄の方が兵糧の点においても配置的にも有利であり、武田領内で本国との補給を発たれている謙信よりも時間が味方しているように見えた。補給路を断たれた段階で、時が経過すればするほどに上杉軍の兵糧は底がついてくる。しかも武田軍の方が数的にも優勢であった。

この不利な状況にも関わらず謙信が不動であることが信玄の心を不安にしてい⁽³⁰⁾。具体的な策までは測れなくとも、謙信が『孫子』に言う「死地」に兵をいれたことだけは信玄も理解している。茶臼山布陣から5日が経過した。ある程度の時間と考える余裕を与えられた信玄は、川中島を越えた巨大な地図の中で謙信が巨大な外線を作り上げ、信玄を大規模に包囲していることに気がつく。

善光寺の北方70キロに春日山城があり、2万人を超える兵力が詰めているが、それは何の遮断も受

けずに善光寺と連絡が可能である⁽³¹⁾。この善光寺－春日山城の巨大な線が信玄に北方から圧力をかけている。善光寺の兵は5千人だが、春日山城との連絡が遮断されていないことを考えると実は2万5千人に達する計算になる。2日以内で春日山城－善光寺は到着可能だから、春日山城に変化があったら信玄に残された猶予は数日になる。妻女山から謙信の監視を受けながら、川中島そのものが包囲されていたのである。

本来、謙信は3万3千人の軍を川中島付近に集結しておけば、たとえ謙信自身が率いていたのが8千人でも信玄は謙信の意図を見抜いてしまったろう。善光寺に相当数の兵を残しては、妻女山から謙信が海津城救援に来る武田軍の北上を待ち受けたとしても用心深い信玄は決戦に乗ってこない可能性が高い。謙信は川中島地方に兵力は集中できなかった。そのため兵力集中を広義に解釈し、一戦場への兵力集中を「可能」にしておくことで、後々に心理的には兵力集中の効果を倍増させたのである⁽³²⁾。

妻女山に籠もる謙信によって監視されていれば、やがて春日山城－善光寺軍が戦場に投入されることで信玄がとった有利な態勢は一転して不利になる。そうなった段階では、謙信がいかなる行動をとろうにも北方の大軍に監視されて海津城の兵は動けず、信玄は避けようとしていた謙信との正面衝突を強要される可能性があった。あるいは海津城、茶臼山それぞれが各個撃破的に包囲される可能性もある。包囲された上で兵糧が尽きれば、いやおうなく決戦とならざるをえない。いずれにせよ信玄が謙信を後方の善光寺と遮断しようと考えた段階で、謙信の包囲網にはいつてしまったのである。

8月29日、信玄は茶臼山を引き払い海津城に移動する。これは謙信の包囲網の中で比較的安全な城への移動と相互挟撃という決戦態勢を解いたことを意味する。海津城での籠城は、城攻めの効率を考えれば茶臼山布陣よりも安定しており、しかも兵糧的にも長期に渡っての籠城を可能にするからである。形の上では持久戦体制に入ったとも言える。

戦理を念頭においた信玄の計算によれば、対陣中よりも、拠点の移動中こそが危険な瞬間であった。川中島への移動中、川中島よりの撤退中、そして布陣場所の移動中は野外行軍であり敵の攻撃を受ければ否応なく野戦で対応しなければならないからである⁽³³⁾。謙信がこの瞬間に攻撃をしなかったのは信玄ほど戦理に忠実で慎重な人物ともなれば、むしろ移動そのものに大きな罠があるとの判断が働いていたと推測できる。すなわち置かれた状況の危険性に気がついたからといって信玄が後先考えずに移動するなどということは考えられず、支障なく移動できればそれでいいし、もし攻撃されたら逆にその瞬間を利用しようという一石二鳥的な選択がなされているはずである。伏兵などによる罠がないと考えることには無理がある。そして、最大の決戦の機会を、信玄が危険を認識していたこの移動中にはないと作戦計画段階で判断していたからに違いない。

信玄としては、北上中の迎撃とともに、謙信が仕掛けた罠に気がついて自軍が海津城へ移動する時の攻撃こそが謙信の意図したことであると解釈したようである。そのため、海津城に入って善光寺と妻女山との連絡が可能になった段階で、意図が破れた謙信は越後へと撤退するとの判断が働いていたように見える。信玄の視点に立てば、既に妻女山で周辺を威圧するという謙信の政治的效果は成し遂げられているはずであった。

海津城に入った信玄は、妻女山から謙信が撤退するのを待っていた。謙信が撤退すれば海津城防衛という目的を達成したことになり、信玄も撤退できる。兵の損失の大きい決戦は避けたいが、長陣も

また兵糧の消耗が激しい。『孫子』の言う「拙速」は信玄の基本でもある。それに可能性は低いとはいえ、撤退中に追撃すれば勝利を得ることも可能である。特に犀川を渡る瞬間は逃げ場がないだけに最大の機会であった。

信玄が川中島という限定された地域での包囲体制を解くことによって謙信は撤退可能になる。にもかかわらず謙信は動かない。信玄の茶臼山布陣段階で10日で尽きるとされていた兵糧⁽³⁴⁾も善光寺との連絡が可能になったためにかえって謙信の長陣を可能にしてしまった。海津城は茶臼山よりは安全とはいえ、依然として謙信の外線の中に置かれ、基本的に妻女山と善光寺－春日山城によって挟撃される危険性は残っていたし、その場合に川中島に集結する兵力数が謙信が多くなることも変わっていない。信玄が先に撤退すれば実質的な敗戦となり、しかも撤退途中に迎撃される危険は残っている。この海津籠城中に信玄は謙信を殲滅する方向に再度考え方を切り替えたようである⁽³⁵⁾。信玄は「敵の行動に対して抵抗できない」⁽³⁶⁾ことから「不意に不利な地位に投げ込まれた」⁽³⁷⁾ことに気がついたのであるが、このことを誰にも漏らしていない。漏らせば全軍に動揺が走るからであるため焦りの気持ちが加わっていく。

武田軍には別の問題も浮上する。大軍でありながら慎重に構えて動かないことに対する不満である⁽³⁸⁾。馬場信房や飯富虎昌ら的高级将校の中からは大軍でありながら謙信を恐れているような自軍に対する不満が始め⁽³⁹⁾、そしてより致命的なのは一般兵士の中に出始めていた厭戦気分である⁽⁴⁰⁾。軍隊が溶解する危険が高くなりつつあった。

川中島を一望にできる妻女山から監視されて信玄は動けない。撤退は不可能であった。なぜならいかなる進路をとろうにも謙信からは丸見えであり迎撃の可能性が高い。甲府への道は遮断されていたのである⁽⁴¹⁾。それに相手の2.5倍の兵を誇りながらの撤退は天下の物笑いになる。しかも撤退すれば海津城は放棄されることにより、信玄は戦争目的の一つを達成できなかったことになる。2万人の大軍を有しながら信玄は海津城から動けない⁽⁴²⁾。かといって、春日山城からいつ援軍が到着するのかを考えれば時の経過は不安感を増させる。いまや信玄は何らかの行動を起こさなければならなかった。

現時点での信玄の利点は、少なくとも限定された地域では兵力の優勢を保っていることである。しかし時が過ぎればこの利点は覆される可能性が高い。一見すれば、より長く滞在している謙信が兵糧消費から不利になるのだが、実際には時は信玄と敵対していた。謙信が動くのは兵糧が無くなる時、そしてそれは春日山城の兵力が南下して挟撃体制に入る瞬間ではないかという推測も成り立つ。皮肉にも先陣が有利とした『孫子』の言葉が、ここで現実化していた⁽⁴³⁾。

では打開策として信玄が先に動き、妻女山を攻撃したらいかなる結果が予想できるか。謙信が外線の立場とすれば信玄は内線の位置にいる。しかし妻女山と善光寺に対して各個撃破の「内線の利」はいかされない。妻女山という要所に陣を構えた謙信は、籠城軍と同じ利点を有し、その攻略には城攻め同様の困難がつきまとう。3日以内に攻略できなければ、善光寺の上杉軍は急を告げ、春日山城の兵力が駆けつける可能性がある。しかし、城攻めの困難に加え、謙信という名将が指揮するという点を考慮すれば、2.5倍の兵力差で信玄が短期間に妻女山を陥落させることは不可能であった。逆に善光寺を攻撃すれば妻女山から背後に回られる。となれば、何かをきっかけとした奇襲のみが打開策となる。

結論にかえて 啄木鳥作戦の始動

現状の危険性の高まりの中、謙信の妻女山布陣より25日、信玄の川中島到着より15日が経過した9月9日、霧の発生が予測され、信玄が軍議をひらく。春日山城の大軍が投入されない前に行動する必要性と、軍を溶解させない必要性から現状を打開するための行動をとることにしたのである。春日山-善光寺の連絡線の圧迫と軍の溶解とが既に作戦行動の必要条件となっていた。それに十分条件として霧の発生が加わったのである。

霧の発生は前日に予測できるとされている。信玄が霧の発生を予想して利用しようとしたのに対し、謙信は霧の発生が信玄の奇襲につながることを予測して霧の発生を待っていた。世に「啄木鳥作戦」として知られる旋回運動が霧の中で指導した時、謙信は信玄を自分が望む戦場に誘致することに成功した。

戦争目的は戦争形態を決定するが、奇襲を単なる現状打開策にとどめず、確実な形での殲滅戦にまで高めようとした信玄の着実さは、結果的に謙信からの殲滅戦を受ける形で八幡原での大会戦となり、双方ともに殲滅戦を望んだことが史上希に見る死傷率をもたらしたのである。

注

- (1) 河野収 (1984)、「新分析戦略戦術『戦略』の信玄対『戦術』の謙信」『現代に生きる戦略・戦術 川中島の戦い』、旺文社、浅野裕吾 (1996)、「作戦研究 川中島合戦」『別冊歴史読本戦国史シリーズ(5) 戦国宿命の好敵手』、新人物往来社。他に、戦前は井上一次中將が、また戦後においては武岡淳彦氏が軍事的視点から取り上げているが、研究書全体の中でみればわずかということになる。
- (2) このシリーズは直接的に天下に影響があった合戦を中心にしているため、川中島合戦は局地戦とみなされて除外されたものと推定される。現在においても地方勢力による国境付近の狭い地域をめぐる局地戦とみる見方は残っている。たとえば山室恭子『群雄創世紀-信玄・氏綱・元就・家康』朝日新聞社、1995年。しかし、永禄4年川中島合戦の結果として、東国におけるバランス・オブ・パワーをほぼ固定してしまっており、その意味で決定的な意味を有していたと考えられる。また、川中島地方は、単なる穀倉地帯ではなく、北陸勢力と中部勢力が交錯する地政学上の要衝であり、そのために戦国期の「川中島合戦」よりも前に、三度も大きな合戦が行われているほどであり、単なる国境紛争とは次元が異なるほどの重要性を帯びていた。
- (3) 軍記物語の不備を補うことは社会科学方面で確立した諸概念を演繹的に照合することで十分に可能であると信じるものであり、こうした視点からかつて「平知盛と『海軍』戦略 軍記物語にみいだされる戦略原則」を検証的に作成している。
- (4) 川中島合戦についての史料不足は、日本においては年代記作成などの伝統がないことだけでなく、武田家滅亡に際して文書類が焼き払われてしまい、謙信死後の「御館の乱」で上杉家でも相当数の文書類が焼失してしまったことが原因としてあげられる。従って、まとまった史料としては『上杉家御年譜』、『妙法寺記』などごく少数になってしまう。
- (5) 上杉謙信研究の集大成とも言える『越佐史料』においても、永禄4年川中島合戦については、「本田文書」「歴代古案」「中條文書」「安田文書」「武州文書」といった書状、感状以外には『妙法寺記』、『上杉年譜』とともに『甲陽軍鑑』を取り上げている。なお、「北越軍記」についても「参考」としてではあるが掲載している。高橋義彦編 (1971)、『越佐史料 巻四』、名著出版、347～364頁。
- (6) 『越佐史料』の中で永禄4年の川中島合戦の経緯にふれているのは『上杉年譜』、『越佐史料』以外では、『甲陽軍鑑』、『北越軍記』などの軍記物語である。一般に永禄4年川中島合戦として紹介されている内容は戦前に日本軍参謀本部がまとめ上げたものであるが、主として『甲陽軍鑑』、『甲越信戦録』、『川中島五箇度合戦』などの軍記物語を複合させたものであり、軍記物語のほとんどがこの三種を基に書かれているためすべての軍記物語を検証する必要はないとみなされるが、各々の軍記物語には著者が独自に調査した内容もあるため比較検討は必要とみなした。

- (7) 武岡淳彦氏でさえも「信玄の精緻をこらした戦略を縦糸とすれば、常人の及びもつかない天才謙信の絶妙な戦術を横糸として、見事に織り上げられた壮絶華麗な合戦絵巻」と述べられている（武岡淳彦（1981）『戦国合戦論』ブレジデント社、66頁）。
- (8) クラウゼヴィッツは戦略を「戦闘自体を組み立て、実行する活動と戦争の目的を達成するために戦闘を目的に結びつけておく活動」（クラウゼヴィッツ、日本クラウゼヴィッツ学会訳（2001）『戦争論 レクラム版』芙蓉書房出版、108頁）であり、「戦争目的を達成するための戦闘の使用に関する規範」（クラウゼヴィッツ『戦争論 レクラム版』、108頁）とみなしている。5次に渡る川中島合戦全般を概観し、天文22（1553年）～永禄7年（1564年）までを、上杉・武田間の戦争とみなして「大戦略」が支配するものとみなせば、永禄4年（1561年）の合戦は、戦役の定義「軍隊の出征から期間までの全軍事的行動、あるいは狭義においては場所的、時間的に限定された一区切りの軍事行動」に該当するものであり、戦略が優劣を決定するものとみなせる。謙信の布陣自体は戦役を支配する戦略に該当するものとみなせる。
- (9) 永禄4年段階では武田晴信と上杉政虎と記述するのが正確であろう。
- (10) この地方で行われた主要な合戦だけでも「横田川の合戦」（治承4年、1181年）、「舟山の合戦」（建武2年、1335年）、「大塔合戦」（応永7年、1400年）などがあげられる。
- (11) 戦争目的が戦争形態を規定し、軍隊も政策に従事しているとみなせば、永禄4年の川中島合戦が、なぜ未曾有の激戦となったか、それゆえに双方の率いていた軍の兵数と形態ともに殲滅戦を狙ったレベルになったことが理解できる。謙信は第一次川中島合戦から一貫して信玄に決戦を強要しようとしていたが、信玄が殲滅戦を望んだのは永禄4年段階では最終的に謙信の領国・越後の完全併合により日本海に到達することを戦争目的としていたためである。
- (12) 関東管領就任を祝って太刀を献上した者は、信濃豪族13家、関東の諸将32家、さらに越中や近江の豪族に至る（小林計一郎（1963）『川中島の戦い』、春秋社、108頁）。関東管領職は謙信の軍事能力と併用されることにより、かなりの豪族が服属しているから、信玄よりも広範な地域に影響力を行使できるようになっている。太刀を献上した豪族には、明らかに武田方の豪族もいた。永禄3年の関東出兵に際しても関東以外に芦名氏などの奥羽の兵も参陣した模様で兵力11万5千人が謙信の指揮下で小田原攻めに参加している（工藤定雄他監修（1976）『上杉家御年譜1 謙信公』、米沢温故会、132頁）。信玄も信濃守に就任することによって信濃侵略を肯定化しているから、今日考えるよりも名目上の地位も大きな意味を有していたのである。
- (13) 海津城が建設されるまで信玄の川中島方面の前線基地は、海津城から45キロも甲府寄りの小室であった。海津城の兵数は高坂弾正に属する形で足軽3千人、騎兵6百20人（北村建信（1932）『甲越川中島戦史』、兵書刊行会、153頁）とも千人（布施秀治（1968）『上杉謙信伝』、歴史図書社、239頁）とも言われているが、このことは単に信玄の活動のための拠点であるだけでなく、常時周辺豪族にらみをきかせ、北信濃を侵略することも可能にしたことを意味する。なお、常時数千人の兵が駐屯する城は武田全軍に占める比率としても相当に高いものである。
- (14) 『孫子』が信玄に与えた影響については海上知明（2006）『信玄の戦争 戦略論「孫子」の功罪』、KKベストセラーズを参照。
- (15) 援兵は相互に行われていた。永禄4年の関東出兵に際しては信玄、今川家ともに北条氏に援兵を送っている（工藤定雄他監修『前掲』、136頁）。同年の川中島会戦には、今川家からは朝比奈兵部、岡部治郎が数百騎、北条家からは多目周防、九島伊賀、村岡兵庫助が3百騎を率いて参加していた（工藤定雄他監修『同上』、151頁）。『鎌倉九代後記』では北条氏からは多目周防と石巻隼人の参加となっている（長野市教育会（1930）『川中島戦史』、大正堂書店、190頁）。
- (16) 信玄の妻（三条公頼の娘）と本願寺門跡顕如上人光佐の妻は姉妹であった。しかし北陸地方の一向宗の指導者、超賢と謙信は友好関係にあったため、一向宗徒による大規模な越後侵攻はこの時にはなかった。
- (17) 河野収氏は甲斐の人口を17万人、信濃の人口を45万人、越後の人口を55万人と推定している（河野収『前掲』、31頁）。なお、面積的に言えば甲斐4463平方キロ、信濃13582平方キロ、越後12576平方キロであり、石高では慶長3年の検地の結果として甲斐22.8石、信濃40.8石、越後39.1石となっているが、越後の見積もりはだいぶ少ないとされ、その後の検地で越後の石高は急速に上昇し、享保6年には81万6千7百75石となっているから、謙信時代の石高も表面的な数字よりもはるかに高かった可能性がある。
- (18) 1万石につき250人というのは兵農分離を進んだ豊臣秀吉時代の慶長年間の朝鮮出兵で課せられた軍役人数であるが、小田原攻めや関ヶ原合戦では1万石につき300人が動員されている。最盛期の信玄の動員力について、和田政雄氏は『甲陽軍鑑』の記述を全面的に肯定し、信玄の兵力を5万人とみなしている。それによれば騎馬9千21騎、1騎に4人の従卒がつき、それに信玄直属の旗本と足軽6千3百人を合計した数字である（和田政雄（1942）『信玄と謙信』、潮文閣、66頁）。信玄晩年の武田領は120万石前後であったから、通常の算法では3万人程度になるから2倍弱である。農兵の比重を高めることによって単位石高あたりの動員力は上昇する。例えば小田原北

条氏配下の足輕大将、大藤長門守の場合、「北条家人数覚書」では50騎の人数を引き連れていたことになっているが、「大藤文書」では252人を引き連れていたことが記録されている。1騎につき4人の兵がついていけるとすると表面的な動員数に5倍されなければならない。すると天正15年に北条氏が動員した人数は「北条家人数覚書」に掲載されている3万4千2百騎の5倍、17万2千2百50人の動員があったと推定できるが、当時の北条氏の領土は270万石程度であったから、1万石につき700人弱の兵を集めることが可能となる。謙信も農兵の比重を高めていたようである。永禄11年(1568年)に北越後の本庄繁長の叛乱鎮圧に際して、現地に派遣した直江政綱と柿崎景家に対して「地下鎧」(鎧を持った地下人)を集めることを指示しているし(高橋義彦編『前掲』, 670頁)、元禄3年(1572年)には上田の栗林二郎左衛門尉政頼に対しても地下人を多く集めるよう指示している(高橋義彦編『越佐史料 巻五』128頁)。また同じ栗林二郎左衛門尉政頼に対して、天正元年(1573年)8月にも地下人への指示を出している(高橋義彦編『同上』, 196頁)。地下人は短期間の防衛用に利用されることが多かったようで永禄3年(1560年)の関東出兵に際しては頸城郡の地下人を春日山の防衛にあたらせるよう指示も出している(高橋義彦編『前掲』, 252頁)。この算出法をとっていたとすれば様々な軍記物の類で「誇大」だと言われている兵数についても、実数に近い可能性がある。

- (19) 工藤定雄他監修『前掲』, 151頁。
- (20) 通説による。『甲陽軍鑑』では1万3千人での着陣だが(磯貝正義、服部治則校注(1976)。『改訂 甲陽軍鑑 中』, 新人物往来社, 151頁)。『上杉年譜』では1万8千人となっている。史料性は『上杉年譜』の方が高いとされているが、なぜかこの時の記述には越中に向かっている斎藤朝信が川中島出陣の軍勢の中にはいたりして誤記が多く信憑性が薄くなっている(工藤定雄他監修『前掲』, 170頁)。
- (21) 謙信は機動力を重んじていたため、直属兵により構成された中規模の兵力を駆使することが多かったとして、好んで指揮する兵力は8千人程度との説(栗岩英治(1943)。『飛将謙信』, 信濃毎日新聞社, 215頁)、1万~1万5千人との説(井上一次(1942)。『兵学より見たる川中島の戦』, 日本出版社, 66頁)があがっている。これらの数字は『甲陽軍鑑』と『上杉年譜』に各々掲載されている永禄4年に春日山城を陥った人数から善光寺に残した5千人を引いた数である。なお、『北越軍談』では「定式の八千」(井上鋭夫校注(1969)。『上杉史料集(上)』, 新人物往来社, 386頁)とか「戦兵八千を限とし」(井上鋭夫校注『同上』, 421頁)の記述があり、謙信が常時使用した兵数を8千人としている。『謙信家記』でも8千人という数字があがっている(黒川真道編(1983)。『越後史集上杉三代軍記集成-天-』, 聚海書林, 76頁)。
- (22) 今日では妻女山への布陣が通説になっているが、『上杉家年譜』では「西条山」と記述し(工藤定雄他監修『前掲』, 172頁)、『甲陽軍鑑』(磯貝正義、服部治則校注『前掲』, 151頁)だけでなくほとんどの軍記物語は「西條山」と記述している。「妻女山」の記述は『甲越信戦録』からで、そこでは西條山は誤りとされている(岡澤由往訳(2006)。『甲越信戦録』, 龍鳳書房, 197頁)。西條の記述は以下の通り。『川中島合戦評判』、『謙信家記』、『上杉輝虎註進状』(黒川真道編(1983)。『越後史集上杉三代軍記集成-天-』, 242頁)、『春日山日記』(黒川真道編(1983)。『越後史集上杉三代軍記集成-人-』, 63頁)。『北越耆談』は弘治3年の合戦のこととして謙信が西條山に陣をひいたとし(井上鋭夫校注『前掲』, 75頁)や『上杉将士書上』では第5回戦のこととしながらも永禄4年に西條山に陣取ったと書かれている(黒川真道編『越後史集上杉三代軍記集成-天-』, 163頁)。もっとも、西條の名前を使って『北越耆談』、『松隣夜話』(井上鋭夫校注(1969)。『上杉史料集(下)』, 新人物往来社, 159頁)、『上杉将士書上』、『北越太平記』、『謙信記』(黒川真道編『越後史集上杉三代軍記集成-天-』, 202頁)、『太祖一代軍記』(黒川真道編『越後史集上杉三代軍記集成-人-』, 124頁)では、海津城を貝津城と書いてあるので西條山も単なる当て字ではないかという考えも成り立つ。川中島地方には西条も存在しているが、やはり海津城を監視し動きを封ずる位置にあるので、この可能性も否定できない。実際に現地に行くと妻女山布陣とはほぼ同じ効果をもたらすように見える。従って新史料でも出てこない限り正確な判断はつきかねる状況なのだが、海津城監視では同程度の効果であり、信玄迎撃ではより有利であることから定説通り妻女山としてみた。
- (23) 春日山城から妻女山に至る進路の可能性も研究者によって異なっている(一ノ瀬義法(1981)。『激戦川中島』, たつのこ出版, 41~42頁)。しかし北国街道を南下したことは基本であろう。距離的にみても所用時間は2日間かからない。
- (24) たとえば三池純正(2006)。『真説・川中島合戦』, 洋泉社, 166頁。この説での強調点は海津城の東、西、南には尼飾城、寺尾城、金井山城、鞍骨城、天城城、竹山城、雨宮城、鷲尾城と無数の城塞群が築かれており、謙信の妻女山への通過は不可能であったとするものである。しかし小規模な城は戦時にはほとんど機能せず自落することが多い。武田信玄の父・信虎が天文9年に信濃に進行したときには1日に36城が落ちたと『妙法寺記』にあり、天文17年には13の城が自落、天文19年の信玄の小笠原長時攻略には5城が自落、天文22年に1日で16城が落ち、天文23年には1夜にして9城が落ちている。第5次川中島合戦が、城塞群よりもはるかに南で起こったことから

考えても、海津城を囲む城塞群は、平時の支配を円滑にするためのものであって、本格的な敵襲を受けての戦時にはまったく役に立たないことは明らかである。

- (25) 『孫子』を習得した信玄が謙信よりも少ない軍で戦うとは考えられない。実際に信玄は通常は相手の2倍近い兵力を集中することを基本としている。なお『上杉年譜』では信玄が2万人で甲府を発ったとの記述がある(工藤定雄他監修『前掲』, 172頁)。しかも諸将の中に山本勘助の名があるなど不可解な点も多い。一方、『甲陽軍鑑』では善光寺に謙信が5千人の兵を置いた記述がなく、1万3千人で妻女山に籠もったとしている(磯貝正義、服部治則校注『甲陽軍鑑二』, 153頁)。
- (26) 信玄が相当に迷ったらしいことは、甲府―川中島間を7日かけていることにもあらわれている。信玄は北上中に腰越や上田で謙信の状況を詳しく報告させている。なお、この時の北上進路の詳細については北村建信氏と藤枝直枝氏が異なった説を出している。
- (27) 天文24年から弘治元年にかけての犀川を挟んだ対陣で、「河の半渡」を攻めるという原則から、謙信はいかなる信玄側の挑発にも応じず150(90~200)日間動かなかった。
- (28) 弘治3年で謙信は思い切って武田領内深く侵攻してから一気に偽装退却をして追撃する武田軍と上野原で合戦している。追撃されるのは不利を承知での作戦であった。
- (29) 茶臼山は標高730メートルあるために、信玄が茶臼山に布陣できるはずがないという説が以前には有力であった。しかし、布陣場所は山頂とは限らず、少数の兵のみを物見として山頂に置いていたと仮定すれば合理的な布陣になるとして、最近は茶臼山布陣への異議は少なくなっている。例えばノ瀬義法氏は様々な説を紹介をしているが茶臼山布陣に否定的な説を取り上げていない。茶臼山布陣も『甲越信戦録』の記述であり(岡澤由往訳『甲越信戦録』, 200頁)。それ以前には信玄の布陣場所とされていたのは「雨宮の渡」である。『甲陽軍鑑』だけでなく『上杉家年譜』(工藤定雄他監修『前掲』, 172頁)、『松隣夜話』(井上鋭夫校注『上杉史料集(下)』, 159頁)でも「雨宮の渡し」に陣取ったとされている。一方、『北越軍談』では茶臼山となっている(井上鋭夫校注『上杉史料集(上)』, 387頁)。茶臼山布陣とすれば妻女山を睥睨することが可能な上、山に籠もるということで攻めにくい配置となることになる。「雨宮の渡」に陣どったすれば、千曲川天然の堀とした形となる。このように若干の差異はあるが、戦略的位置としては大差はない。妻女山善光寺との間を遮断することが布陣の目的なのである。
- (30) 双方とも斥候などで相手の状況を推測しているが、『甲越信戦録』などの軍記物は謙信が琴をならし小鼓をうち悠然としていたことを記し、信玄がその報告に不安を覚えたとしている(岡澤由往訳『前掲』, 207頁)。これが事実かどうかは確認のしようもないが、「死地」にいる謙信の意図を、信玄が様々に熟考していたことだけは推測できる。
- (31) この時の外線について若干なりともふれているのは、戦前は大場弥平氏ぐらいである。大場弥平(1937)、『名将兵談』、実業之日本社。戦後は半藤一利氏が若干ふれている程度である。軍記物語の中では『川中島合戦伝記』の中に春日山へ援軍依頼を打診するくだりがみられている。
- (32) 兵力を分散させることにより、逆に兵力集中を可能にしておいたということになる。リデル・ハート、森沢亀鶴訳(1973)、『戦略論(下)』、原書房、361頁。Basil Liddell Hart (1991). *Strategy*, Meridin, p.329. これは「流動的集中」と呼べるかもしれない。リデル・ハート、石塚栄/山田積昭訳(1976)、『ナポレオンの亡霊 戦略の誤用が歴史に与えた影響』、原書房、109頁(Basil Liddell Hart (1934). *Ghost of Napoleon*, Yale University)。
- (33) ただし、従来歴史学者などがとらえていたような二列縦隊の移動ではなかったと思われる。これは謙信が妻女山に入る時も、信玄が茶臼山に入る時も、後に信玄が妻女山へ霧中を派遣した別働隊も、そして謙信が霧中を八幡原に移動した時も基本的にはすべて該当する。謙信にとって善光寺から南が、信玄にとっては有明山付近から北といった川中島地方一帯が、戦場たり得る場所「作戦地帯」だからで、作戦地帯に入ると行軍形態も変化する。本国より作戦地帯手前までは街道などを利用し、縦列の細長い形態(たとえば二列縦隊のような)をとり、通常は作戦地帯の入り口に位置する前線基地でこの形態を解き、武器・食料などの補給を得ながら、戦場になりうる作戦地帯に入っていく。これから先は、ある程度の戦備行軍をとるようになる。なお、二列縦隊の問題は既に戦前に栗岩英治氏が述べている。
- (34) 小林計一郎『前掲』, 135頁。『甲越信戦録』の記述では信玄が謙信の異に気がついて移動するのを予期していたという書き方を含ませている(岡澤由往訳『前掲』, 206頁)。
- (35) 信玄は永禄8年(1565年)頃に南下して駿河から海に出る方向性を模索するまでは、北上して越後を併合して日本海へ出る方針であったため、地政学上の要地・川中島を是が非でも領有する必要があった。信玄にとって川中島合戦は些細な土地を巡る争いではなく、北陸への拡大の前段だったのである。殲滅戦を志向した理由の一つもそこにある。この越後併合願望は春日弾正の東進論のような形で後々まで影響を及ぼすことになった。磯貝正義、服部治則校注『前掲』, 282頁。

- (36) リデル・ハート、森沢亀鶴訳『前掲』、358 頁。Basil Liddell Hart, *op.cit.*, p.327.
- (37) リデル・ハート『同上』、358 頁。 *Ibid.*, p.327.
- (38) 矢合戦ぐらいは行われていたようである（工藤定雄他監修『前掲』、171 頁）。
- (39) 小林計一郎『前掲』、134 頁。
- (40) ここに農兵の有する弱点がある。「対陣 150 日」（計算の仕方により 90 日とも 200 日とも言われている）の時には武田軍からは逃亡者すらでている。そのために持久体制での対陣よりは、合戦前に万端の準備をし、一回の大会戦で勝負をつけるのが合理的な方法であった。従って、上洛のように長期に渡る遠征時には農兵比重を下げることになる。
- (41) 「牽制」（リデル・ハート、森沢亀鶴訳『前掲』、359 頁。Basil Liddell Hart, *op.cit.*, p.328）の結果、「心理的攪乱」（リデル・ハート、森沢亀鶴訳『同上』、358 頁。 *ibid.*, pp.326-327）。に至ったということである。
- (42) 大場弥平氏は数千人の籠城を基準として設計された海津城に 2 万の大軍を入れてしまったことは誤りと見なしている。大場弥平『前掲』。18 頁。
- (43) 杉之尾孝生編著（2001）。『戦略論大系①孫子』、芙蓉書房出版、65 頁。